管 俊青
GUAN Junqing

現代社会における若手アーティストの生きづらさを探る —ドキュメンタリー映像手法を用いて—

Exploring the Difficulties of Life for Young Artists in Contemporary Society: Using Documentary Film Techniques

芸術支援領域

序章

本研究は、現代社会における若手アーティストの生きづらさに対する理解を深めるために、ドキュメンタリー映像の手法をどのように活用できるかを明らかにすることを目的とする。

まず、本論における「生きづらさ」「ドキュメンタリー映像手法」「ライフストーリー」を定義する。

「生きづらさ」については、障害者支援、美術教育実践、社会的マイノリティの人々のアイデンティティ研究、承認の社会学、システム社会論、アート活動によるコミュニティ・エンパワメント等の先行研究で追究されてきた例を検討した上で、本研究では特に若手アーティストの生きづらさに焦点を当て、「心理的または社会的に何らかの葛藤を抱えて疎外感を感じたりアイデンティティに不安をもったりし、本来の力を発揮できていないと自認する傾向」と定義する。

「ドキュメンタリー映像手法」については、映像社会学、教育研究における観察映像撮影研究、美術教員養成における映像分析の活用、映像人類学における理論と実践などの先行研究を踏まえ、本研究では、研究者が研究協力者へのインタビューをビデオ映像に撮影しながら行い、その映像分析から研究協力者のライフストーリーの構成を試みることとした。

「ライフストーリー」とは、社会学、文化人類学、心理学などにおける質的研究法の一つであり、インタビューによって研究協力者が語る生活や人生についての振り返りを文字に起こして物語として構成したものから読み解いていくことである。

本研究ではまず、現代社会における生きづらさと若手アーティストの特有の問題を検討した上で、ドキュメンタリー手法の適用について考察を行った。そして、筆者が依頼した 20 代から 30 代までの若手アーティスト 5 人の研究協力者の映像撮影を伴いながら日常生活を観察し、それぞれの生き方を語ったものを映像記録とともに文字起こしを行い、ライフストーリーとして分析するとともに、映像ドキュメンタリー手法活用の実際について考察した。

第 1 章

本章では現代社会における生きづらさに関する先行研究の検討を行なった。現代社会において人々が生きづらさを感じる現状を述べ、若手アーティストの抱える不安や問題点にも通じる側面を検討するとともに、社会許容度や相対主義、自立などの点から生きづらさと社会との繋がりについて考察した。

本研究では若手アーティストを、現代の日本に在住する若い世代で、美術作家またはそれに類する芸術家としての仕事を目指している若者と定義する。その多くは美術系大学出身で、アーティストとしての実績や社会的評価は様々であるが、キャリアとしてはまだこれからの場合が多い。つまり、アーティストをキャリアとして考えると同時に、学生として学業のことも考える必要がある。

筆者はこれまでも、アートや美術教育に関わって若者がどのように自己を変革していくかを捉えたドキュメンタリー映像を制作してきた。カメラを持つ研究者が調査協力者の生活に潜り込むのは人類学でもよく用いられる研究方法であるが、本研究では映像作品としてのドキュメンタリー制作から研究手法としての映像ドキュメンタリー手法への応用について筆者自らが実践し、研究の独自性を追究したい。

第 2 章

本章では、これまでに撮影公開された 3 つのドキュメンタリー映像作品、NHK『痛みが美に変わる時—画家・松井冬子の世界』、野中真理子『トントンギコギコ図工の時間』、筆者制作による『ようこそ、家へ』をとりあげ、シナリオからアーティストを描写する視点、映像監督からの制作側の視点、実践的に映像制作した筆者の視点から、それぞれの作品の独自性を分析した。カメラマンはどのようにアーティスト（研究協力者）を撮影するか、映像からどのような内容に辿り着くかなどの検討を、本研究で行うインタビュー活動の事前研究として行った結果、研究協力者と研究者の語った言葉を文字化することにより、多様な角度で人物の特徴を描き出せる可能性を指摘した。

第 3 章

第 2 章までの結果を踏まえ、本研究でインタビューを行なった 5 人の中から、まず 1 人の映像記録を例として詳細な分析を行った。

研究協力者の A 氏は、中国から留学し、日本の美術大学の修士課程で日本画を専門に学んだ画家であり、人間社会の群像や人物像をテーマとした作品が多い。大学院修了後帰国前に筆者と約 1 か月シェアハウスで生活を行った時期があり、その間、生活をともにしながら研究に協力した。

映像撮影としては A 氏が旅や作品のアイデアなどを書き留めている手帳について説明しながら筆者と対話する場面、A 氏との単独インタビュー、A 氏が展覧会を見に行くときに同行した場面を記録し、合わせて筆者と共同生活した経験からの観察を加えて考察を加えた。

手帳についての説明映像撮影は、2021 年 5 月に行い、2 冊の手帳について 2 本のビデオ映像を作成した（図 1）。A 氏は旅や生活の記録などもスケッチで残すことが多く、海外旅行の記録などを、会話を交えて生き生きと紹介した。

単独インタビューの撮影は、2021 年 5 月に行い、約 40 分のビデオ映像を作成した。このような場合、対談をする二人に加えて第三者のカメラマンが撮影することも多いが、本研究では、インタビューを行う筆者が同時にカメラマンとして撮影した。その結果、撮影された映像ではまるで対談当事者の視点であるかのように見ることができる。対談は当初日本語で開始し、その後、二人の母国語である中国語に移行した。本論文では中国語の発言部分も全て日本語に訳して分析した。

質問では、最近の日常で描いていること、日本画制作について、日本の生活において慣れないこと、A 氏の作品を見ての具体的な質問、アート制作における困難などを問いかけ、それに対する答えからさらに質問が会話のように広がっていき、家族への思いや、生活における社交的な側面とそうでない時期、作品制作に込める人生観、困難な時にどう対処しているかなどについて、振り返りながら語る時間となった（図 2）。

図 1
A 氏手帳の映像
スクリーンショット

図 2
A 氏の修了作『ジャイアント・バイビ』その 1

図 3
B 氏とその展示作品との写真

図 4
C 氏個人展覧会の一部

図 5
D 氏インタビュー映像のスクリーンショット

図 6
E 氏が描いた 1 日漫画

第 4 章

本章では、A 氏の他にインタビューを行いながら撮影した 4 人の若手アーティストの映像資料と、筆者によるその日常観察を文字化して、個々の個性や生き方をライフストーリーとして描き出すことを目指した。インタビューの内容は、事前に生きづらさというテーマでインタビューを行う旨を研究協力者に相談した結果であり、撮影や映像の編集にはある程度の演出を考え、研究協力者が良い状態でカメラに映るように事前に準備していた。インタビューは、主に各アーティストの作品紹介とそのモチーフを選んだ理由、実技に関する質問、作品創作中にあった困難及び解決法、将来的に絵を描き続けるか別の仕事をするかの選択肢、生活状態の 5 つの質問を中心に対談形式で行なった。4 人のインタビューを行った形態はそれぞれの状況に応じて柔軟に対応し、回数も違うが、会話内容を具体的に分析し、当時の表情・心情、会話の意図、作品への解釈などの側面から若手アーティストが直面している生き方の問題を探り、相互のコミュニケーションを重視しながら、人物像を掴むことを目指した。

B 氏は日本出身で、美術大学の修士課程に在学して油絵を学んでいる。植物に人間の感情を投影した油絵の制作（図 3）。

C 氏は韓国出身で、日本の美術大学の修士課程で日本画を学んで修了し、日本での個展開催を終えて帰国した。植物を題材にして自己の感情を反映させた作品が多い。A 氏と筆者がインタビューの過程でともに訪れた個展会場で研究協力を依頼し、主に同会場で撮影した作品写真と会話をもとに分析を行った（図 4）。

D 氏は中国出身で、日本の美術大学の修士課程で銅版画を学んで修了し、その後も日本で生活している。女性の性意識など、フェミニストの観点を主題にした作品が多い。

新型コロナウィルス流行のためオンラインインタビューで銅版画技法の説明をしたほか、都内美術館で行われた公募展に入選した会場で作品を前に会話をしながら撮影を行った（図 5）。

E 氏は日本出身の漫画家である。日本の美術大学で、「人間との遭遇」をテーマにした漫画に卒業制作として取り組んだ。卒業後に企業に就職したが、その後、漫画雑誌に連載が決まり、ドラマ化もされるなど、漫画家としての道を歩み始めている（図 6）。

終章

本研究の想定では、現代社会における生きづらさは深刻な問題になり、特に感性が豊かなアーティストには生きづらさの問題がより迫っていると考えていた。しかし、若手アーティストの中には、生きづらさの問題を抱えながらも、解決案にたどり着いたケースもあった。

また、ドキュメンタリー手法を用いた研究を通じて、時間をかけて筆者と協力者とのインタビューを行うことで、お互いの理解を深め、各自の生き方をシェアすることができたという点も特筆される。5 人の若手アーティストは個性がそれぞれで、インタビューの際に、インタビュアーとインタビュイーのどちらが聞き手となるか、話し手となるかが変化する。インタビュー映像から直接わかることは、対談者の表情が変わることである。現場の雰囲気が変わったという感覚を感じることができる。また、若手アーティストが自身の生き方について考えを持っているため、筆者の持論に反対する場合もある。

今後の課題

今回のインタビューを通して、筆者が認識したことは、アートを学ぶ学生は生きづらさ問題をかかえる場合があるもの の、感性を重視している学生にとってはそれが創作の元になる側面もあるかもしれないということである。また、若手アーティストにとって持続的な収入の重要性を無視することはできないと感じた。経済的な問題はアーティストの活動を続けていくための重要な関心事の一つであり、社会や教育機関がどのように若手アーティストをサポートするのかも、今後の課題になると感じられた。

また、ドキュメンタリー映像手法を研究で使うことには困難があるが、密着撮影とインタビュー活動により、深く広く研究協力者の状況を再現できる点は重要である。例えば、今回の 5 人の若手アーティストのライフストーリーを通して、同じアーティストを目指している学生が社会人になる際、直面する問題を若手アーティストの生き方から学び、自分にとっての適切な生き方を発見できると良いと考えている。また、アーティストのことをよく知らない人の場合は、若手アーティストの生き方を見て、アートの世界を理解しやすくなるかもしれない。最終的には、美術教育にドキュメンタリー映像手法をより幅広く応用することが可能であると考えられる。